



Title	イザベラ・バード『日本奥地紀行』の観光社会学的分析の試み
Author(s)	西川, 克之
Citation	The Northern Review, 38, 27-39
Issue Date	2012-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49454
Type	bulletin (article)
File Information	NR38_002.pdf



[Instructions for use](#)

イザベラ・バード『日本奥地紀行』の 観光社会学的分析の試み

西川 克之

はじめに

本稿は英国ビクトリア朝時代の女性旅行家イザベラ・バード Isabella Lucy Bird の『日本奥地紀行』*Unbeaten Tracks in Japan* (1880)¹ に関して、当時の社会的状況や彼女を取り巻いていた周辺事情を参照しつつ、主に観光社会学的な視点に立って、いくつかの論点を覚え書き的にまとめようとしたものである。この紀行文に関しては一般的に、当時の社会的・文化的力学に照らしてみれば²、おおむね肯定的に評価してしかるべきであると受け止められることが多い³が、本論においてはバードの描写が客観的で妥当なものであるか否かという価値評価についてはあえて踏み込まず、彼女の論述のあり方を観光社会学的な論点に照らしてみればあぶり出されてくる要素を概観してみたい。

女性であるということ

ビクトリア朝期に多くのイギリス人女性が冒険的な海外旅行に赴いた理由のひとつは、社会的にも政治的⁴にも男性によって支配されていた状況から独立と解放を求め

¹ 原文テキストとしては1880年初版二巻本の復刻版、Isabella Lucy Bird, *Unbeaten Tracks in Japan* (Cambridge University Press, 2010) を用いた。日本語の翻訳に関しては、時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行』、および一巻本の普及版として出された1885年版の翻訳である高梨健吉訳『日本奥地紀行』を参照した。以下本文中本書に言及する場合は、*UTJ*と表記する。

² いまの社会的正義に照らしてみれば、もちろん、特にアイヌの人びとの描写に関しては、バードの表現はまったく適切さを欠いている。それはたとえば「未開人savage」「毛深いhairy」などに顕著である。

³ たとえば高梨訳『日本奥地紀行』の解説に引かれているように、チェンバレン Basil Hall Chamberlain は『日本事物誌』*Things Japanese* (1891)の中で、バードの本は「英語で書かれた最善の日本旅行記」「the best English book of Japanese travel」であり、「アイヌ人の叙述は特に貴重である」「the account of the Ainos [...] is specially valuable」と記している。宮本常一もまた「イザベラ・バードにはそういう[通訳者の伊藤に見られるような]偏見が全然なく、人間である限り誰でも命は大事であるという考えが根本にあった」のであり、彼女が「アイヌをどう見たか、そして、日本人がアイヌをどう見たかということが、[...] われわれに一番反省を与えてくれる」(230-233)と述べている。

⁴ イギリスにおいて制限的なものであれ女性参政権が認められたのは1918年のことである。

てのことであったとされる(Middleton, 7)。Punch 誌が戯画化して描いたように、当時の女性はまだまだ「家にいて赤子の面倒をみたり、すり切れたシャツを繕ったり」“stay and mind the babies, or hem our ragged shirts”をもつぱらとすべきとされていたのであり、広大な外の世界に興味をいだいて「地理好き」“geographic”になるなどもつてのほかであるとされた(Middleton, 14)のだが、女性旅行家たちは、子供を慈しみ育てる母、あるいは夫をけなげに支える妻として家庭を守るべき存在という社会的役割を演じることに息苦しさを感ずき、男の領域であった冒険的旅行⁵に解放の契機を見いだしたのであり、それは女性参政権の実現を求める戦いに結晶化されていく要素を孕んでいたのだった。

支配者のアイデンティティと観察するまなざし

女性としては男性という社会的に優位な存在よりも下に位置づけられながら、一方でバードは、拡大し続ける帝国の市民として、産業技術の先進性や文化的優越さらには堅忍不拔の高い倫理意識を誇り、世界に対する影響力を強めつつある英国という国家に帰属することができた(Mayhan, 50)。そのような支配者としてのナショナル・アイデンティティに支えられることによって、女性であるバードにあっても、欧米にあやかた近代化への歩みを始めたばかりの日本や、あまつさえ「未開」という枠をはめられたアイヌに対しては、冷静で客観的な観察者という「男性的」まなざし⁶が許されることになる。

こうした男性性を身にまとった女性旅行家というアンビバレントなスタンスは、Mayhan (37) も指摘するように、UTJ の序文において既にしうかがえる。

[...] 私が数ヶ月にわたって本州の奥地とエゾ(北海道)を旅行した結果、ここに提供する材料は目新しいものであり、かならずや日本の理解に貢献するところがあろうと信ずる。[...] 私の旅行した地方には、はじめて西欧の婦人が訪れたというところもあり、私の得た経験は、今までの旅行者のものとはかなり大きく異なるものがあった。[...]

本書は、私が旅先から、私の妹や、私の親しい友人たちに宛てた手紙が主体となっているが、このような体裁をとるようにしたのは、いささか気の進まぬことであった。というのは、この形式で本を書くと、芸術的に体裁を整えたり、文学

⁵ 家庭は女の聖域であり、男はその束縛を離れて広大な外部世界に脱出し、しばしば性的な傾向を帯びる冒険に乗り出すというのが、近代における旅の支配的なパターンのひとつである。女にとっては、付き添いもなしに都市をうろつくことさえ危険きわまりないことと認識されていた。(Rojek and Urry, 16-7)

⁶ 18世紀後半から19世紀前半にかけて書かれた旅行記においては、女性の場合、旅先でわざとらしい有頂天な態度を示しがちであるが、そのような態度は慎むべきで、男性らしい誠実な反応を旨とすべきとの記述がみられる。(Chard, 50)

的に材料を取り扱うことが不可能となり、ある程度まで自己中心的な書きぶりとならざるをえないからである。しかし一方では、読者も旅行者の立場に立つことができるし、旅の珍しさや楽しみはもちろんのこと、旅行中のいろいろの苦難や退屈まで、著者とともに味わうことができるというものである。(バード 2000, 17-8)

[...] it was not till I had travelled for some months in the interior of the main island and in Yezo, that I decided that my materials were novel enough to render the contribution worth making. [...] As [...] the first European lady who had been seen in several districts through which my route lay, my experiences differed more or less widely from those of preceding travellers; [...]

It was with some reluctance that I decided that it should consist mainly of letters written on the spot to my sister and a circle of personal friends; for this form of publication involves the sacrifice of artistic arrangement and literary treatment, and necessitates a certain amount of egotism; but, on the other hand, it places the reader in the position of the traveller, and makes him share the vicissitudes of travel, discomfort, difficulty, and tedium, as well as novelty and enjoyment. (Bird 2010 Vol. 1, vii-viii)

書簡体形式を採用した旅行記である *UTJ* は、妹や友人に宛てた手紙という親密な関係に支えられた個人的印象を記した紀行文を装いながら、これまで記録が残されていなかった地域においてだれも試みることのなかった冒険的旅行をなしたのだという自負を前面に出してもいる。したがってそれは、書簡体という様式から予想される期待を裏切るような内容を誇るものであって、一見すると独りよがりであり留めのない印象を並べ立てたように見えながら、実は高度に専門的で貴重な資料的価値を有していると主張される。ここにおいては、いわばこれ見よがしの男性性ではなく、女性らしさという装いの下に隠された、新たな発見を求める強い探求心と困難に立ち向かっていこうとする堅固な忍耐力が示されていることになる。

もちろん、こうした当時の女性としては例外的と言ってもよい旅行が可能になったのは、特別な支援体制があったからこそなのであり、そしてそれはまた、バードがそれなりの資産を有する中流階級の出であるということと密接に関係する。*UTJ* の冒頭にある献辞が、明治維新时期に18年間にわたって駐日英国公使を務めたパークス卿 Sir Harry Parkes の夫人に宛てられていることから窺えるように、バードの旅を無事に完遂させるために、公使館という公的機関をあげてその後方支援に当たっていたのであり、またアーネスト・サトウ Ernest Satow という当代一の専門家その人から日本に関する知識や情報を得ている(Stoddart, 105)。中でもとりわけパークス卿夫人はことのほか熱心にバードを迎え、物惜しみなく冒険旅行に必要な手はずを整える手

助けをした(Checkland, 57)。こうした状況を踏まえると、バードによる日本の奥地や北海道の踏破は、危険をかえりみない外国女性が単独でなした大胆な冒険という様相をいくぶん後退させ、当時の日本と英国の国力の差を背景とし、社会的に優越する側にある者が特権的な立場を活用しながら、未知の世界に向いて観察した結果得られる新しい知見を持ち帰って、帝国の拡大と安定的な経営に欠くことができない地誌情報の蓄積に貢献を成すためのものであったという側面も立ち現れてくるように思われる。

地理学的成果を求めて

植民地開拓と結びついた探検や調査の領域がもっぱら男性によって占められていたのを反映するかのように、大英帝国の拡大とともにその存在意義を高めていった王立地理学協会 Royal Geographical Society⁷ は1830年の創立後もずっと会員資格を男性のみに限定していた。実際、バードをはじめとする15人の女性がはじめての会員として迎えられたのは1892年のことであり、しかもその路線変更は、一部会員の反発を招くなど、決してすんなりと認められたわけではなかった(Middleton, 12)。

いずれにせよ、女性旅行家でありながら「男勝り」の冒険に敢然と立ち向かう行為の果実としてバードが手に入れたもののひとつは、いまだ誰も客観的な記述を残していない、そしてその意味において誰にも知られていなかった地域に足を踏み入れて、「自己中心的」になる傾向を覚悟の上で経験した事実をありのままに伝えることによって、新奇さという価値に裏付けられた地理学的な貢献を果たすところにあったと言える。*UTJ* という旅行記は、まだ見ぬ異国の物珍しい習俗や文化について書かれた本を、読書室でのんびり椅子に座って本を読んでいる(女性)読者の好奇心を満たすことだけを目指していたわけでは決してなく、大英帝国の経営にたずさわる者たちの関心を惹きつけるような、より実利的な要求をも満たすものであった。われわれが少し視点をずらして、「バードの関心はあきらかに、その地域を軍事的に支配するために重要な景観の側面にこそ向けられている」(Harper, 164, Mayhan, 52に引用)という論点から *UTJ* を読み直してみると、そのテキストの意義がより多様な相貌を見せ始めるのではないだろうか。こうしてみると、バードの冒険旅行が、公使館をはじめとした英国政府関係の重要人物たちから直接の支援を受けていたこと理由は、単に女性の単独旅行者に対する博愛的な親切心や、同胞に対しての保護義務を果たそうという意志だけではなかったように思われる。

中流的価値の両面性とツーリズムの否定

UTJ の序文冒頭に示されているように、バードが日本にかけた当初の一義的な

⁷ ヴィクトリア朝時代に王立地理学協会は、実質上、旅行者が実際にある地点に到達したかどうかを認証する機関として機能していた。(Middleton, 10)

目的は自身の健康を回復することにあっただが、上にも示したように、結果として持ち帰ったものは決して物見遊山的な観光客の印象記ではない。それはあくまでも、それまでには知られていなかった日本の姿をありのままに提示するという意味において、日本の地誌研究に貢献するような内容を持つものでなければならなかった。この点においてバードは、福音主義を熱心に信奉する家族の一員という育ち(Middleton, 20)を色濃く反映して、安逸や気晴らしを忌避する傾向が窺える。そもそもこの旅行において、彼女がトルコ風ズボンをはいて馬に跨る *astride*—横鞍 *side saddle* ではなく一出で立ちを採用したこと自体が、当時の中流階級の文化的コードとしての女性らしさへの反逆、すなわち優雅に無為をもてあそぶ余暇の享受という価値に対する挑戦であり、精神的に未開の地に分け入っていくのにふさわしい活動性を備えたものであった。しかるに一方で、ではそれは女性性をかなぐり捨てて男性性のみを標榜する行為であったかという点、それほど過激な装いではなく、あくまで中流的なたしなみを失わない範囲にも収まっている(Mayhan, 40)。

このような禁欲的な旅というバードの基本姿勢は、観光 *tourism* あるいは観光客 *tourist* に対する彼女の否定的態度につながるものである。UTJ においては、バード自身のように新たな発見を求めて、一般の旅行者が足を踏み入れない道 *unbeaten tracks* に分け入っていく旅行者 *traveller* と、おなじみの道程 *beaten tracks* をたどってよく知られた観光地のみを巡って回る観光客がはっきりと対照させられている。

「東海道、中山道、京都へ、日光へ」と、あまたの観光客のおなじみの道程を挙げながら(筆者訳)

“The Tokaido, the Nakasendo, to Kyoto, to Nikko,” naming the beaten tracks of countless tourists. (Bird 2010 Vol. 1, 47)

あちこち旅をしてきた3人の紳士が、支払うべき値段のリストをくれたのだが、地域が違えば差が大きく、観光客におなじみの道程にあると大いにふっかけられる(筆者訳)

Three gentlemen who have travelled extensively have given me lists of the prices which I ought to pay, varying in different districts, and largely increased on the beaten track of tourists (Bird 2010 Vol. 1, 51)

「あまたの観光客」「観光客におなじみの道程」といった言い回しは、あたかもこの時代の日本においてすでに「集合的まなざし *collective gaze*」(Urry, 43)が成立しているかのような印象を与える記述であるが、同時にまたそこには、金遣い荒く観光地の消費にいそむ群れなす観光客から、未知の文化や景観を求めて孤高の道を進んでいく恐れ知らずの旅行家 *intrepid traveller* である自らを差異化しようというバード

の意図が明確に読み取れる。

トマス・クック Thomas Cook の団体旅行がはじめてイギリス海峡を渡ったのは 1851 年のバリ万博見物を目的としたものだったが、海外団体旅行が本格化するのには 1860 年代のことである。こうした旅行の参加者、特に女性の参加者にとっては、たとえば単独で試みることなど思いもよらないスイス旅行という冒険的企てを、560 人規模の団体旅行で実現してくれたクックというガイドは「聖人」であり、見事に準備され客の要望にきっちり答える運営のあり方は「奇跡」であると評価されることもあった (Brendon, 83)。しかしながら一方で、このような団体旅行によってホテルが乱立したり、イギリス風の生活を旅先に持ち込んだりすることによって、自然が壊され地域の独自性が失われるといった危惧が特に当時の保守的な社会批評家たちから表明される。中でもとりわけ、旅先における英国人観光客の無教養な振る舞いを嘆く調子がしばしば繰り返された。

サッカーは「この世で最も退屈な人種のひとつがヨーロッパの地を踏み荒らし、フランスの靴磨き子ども美術について知識がないのに、人をかき分けて美術館に入っていくのだ」と声高に批判した[・・・]ジョン・ニューマン枢機卿は、無知な観光客が考えているのとは違って、旅行は教育の代わりにならないと言う。

彼らは眠って起きては、ヨーロッパやアジアに出没する。大都市や自然のままの地域の景色をながめる。商業市にいたかと思えば、南の島にも出かける。ポンペイウスの巨柱やアンデスの山並みに視線を送る。しかし彼らの目に止まるものはなにひとつとして彼らを理念へと駆り立てることはない。過去の歴史や将来の見通しと結びつくことがない。あらゆるものがそこにあるだけで、移ろう雪景色のように、ただやって来ては過ぎ去るのみで、それを見る者には何ら進歩がない。

クックの旅行先がさらに遠くなるにつれて、こうした見方があちこちで繰り返される[・・・]「休暇旅行の間じゅうガイドに案内されて、インド、日本、アメリカを巡る企画旅行の参加者に関して言えば、ほとんど一歩たりとも家を出たと言えない。じっと座って、動く覗き絵を見ていることとほとんど変わらない。」「[・・・]ビクトリア朝の社会批評家たちは、知的に優越する立場から、観光が学習経験の一部となりうることは認めることができなかったのだ。(Brendon, 88, 筆者訳)

このような文脈で考えてみると、バードが用いる「踏み固められていない unbeaten」と「踏み固められた beaten」は、もちろん単なる道路の物理的屬性の違いのみを言い表すものでは決してなく、英国 18 世紀後半の社会批評家たちの言説に連なる意味合いを包摂しているのであり、後者が、楽しみを手に入れるために余暇の時間とお金を費やし、ガイドブックなどの既知の情報のみを頼みにして有名観光地として記号化された場所を巡り歩く観光客 tourist が漫歩する街道を表象するのに対して、前者は、

ただ楽しむためではなく新たな知見を得たり学術的貢献をなしたりするために観察し記録する旅行者 traveller が踏破する奥地を含意する。

このような二項対立は、たとえば *UTJ* の以下に示す部分についても明らかに窺える。つまりバードは、東海道や中山道、琵琶湖や箱根について書く観光客の描写と彼女自身の記述が食い違う部分があるかも知れないが、それはどちらかが不正確な書き方をしていることを意味しないと述べつつも、彼女の記す日本こそ「あたらしい日本」「a new Japan」なのであり、「過去の旅行記からは想定されなかった」「no books have given me any idea」ような実態なのでであると主張する(Bird 2010 Vol. 1, 150)。ここでバードは、従来の観光客によってもたらされてきた情報が、いかに限定的なものであるかを示唆した上で、自らが観光客のカテゴリーに括られてしまうことに抗おうとする姿勢を打ち出していると言える(Mayhan, 49)。すなわち、バードのような福音主義的禁欲になじんだ女性旅行家にとっては、ただ単に楽しむためだけに旅するのは間違いであり、訪れた土地の文化や社会の指標となる統計的数値のメモ書きや、風俗や習慣を活写したスケッチなどを持ち帰ってはじめて、日本の奥地へ出かけるなどという酔狂が正当化されるのである(Middleton, 5)。

オーセンティックな日本

これまで誰にも知られていなかった日本を紹介するということは、手垢にまみれステレオタイプ化した日本のイメージの背後に隠れている、本物の日本を探り当てることをいう。それはすなわち、月並みな観光客が興味を示さない、あるいはまなざしを向けない対象を直視することであり、ゴフマン的な意味での裏領域⁸を覗き込もうとすることである。したがって時には、必ずしも読者が予想あるいは期待していないような現実を突きつけることになるかも知れないが、それこそがオーセンティックな日本の姿なのであって、たとえ読者に不快感を与えるのを避けるためであったとしても、事実ありのままの描写を犠牲にすることは許されない。

書簡のなかには農民の現状について、一般的に描かれたものより不愉快な描写をなすものもある。あまり赤裸々に表現しないほうがよかったのにお思いの読者もおられようが、描写された状況は厳密に典型的なもので、わたしがつくりあげたものでも探し求めて見つけ出したものでもなく、事実を知らせるために提供する次第である。(バード 2008上, 5-6、一部筆者訳)

Some of the Letters give a less pleasing picture of the condition of the peasantry than the one popularly presented, and it is possible that some readers may wish that it had been less realistically painted; but as the scenes

⁸ ゴフマン Erving Goffman の「表領域 front region」「裏領域 back region」概念については MacCannell, 590 および Meyrowitz, 28 を参照。

are strictly representative, and I neither made them nor went in search of them, I offer them in the interests of truth (Bird 2010 Vol. 1, viii-ix)

限られた条約港から日本に入国し、物見遊山気分で観光地に出かけては不遜や狼藉をはたらき、通訳者の伊藤に嫌悪感を催させる英国人男子の団体旅行者 excursionists たちとは対照的に、バードは日本風の礼儀作法をしっかり守ろうと常日頃気をつけている (Bird, 2010 Vol. 1, 156)。ここにおいても、単独の女性旅行者たるバードは、徒党をなすかのような男性観光客の対極に自らを位置づける。パッカス的な乱痴気騒ぎに耽るばかりで、日本の社会や文化のほんとうのあり方をかいま見せてくれる舞台裏にはからっきし関心を示すことのないこれらの質の悪い観光客の場合とは違って、バードの旅は楽しみのみを追求するのを潔しとしない。奥地でしか見出せないような本物の日本を探し求めるからこそ彼女は、ホスト側との信頼関係を築く必要など微塵もない連中と距離を置かねばならなかったし、また禁欲を旨とする福音主義者としての立場も相まって、自己と他者を向上させたいというビクトリア朝時代特有の情熱が、バードのような旅の形態においてこそ発露を見出していた (Middleton, 6)。こうして、宗教的な信条に由来する社会的意識の面において、バードは欧米列強のひとつからやって来たかなりの身分の女性であることを周囲に漂わせながら、常に礼節をわきまえリスpekタブルな態度で日本人に接していたと言えようが、このような姿勢にはもうひとつ、より実利的な要因も関わっているように思われる。つまり、ふつうの観光客の目には触れることのない裏領域で展開されている生活や情景に関する正しい情報を入手するために、旅行者はまず取材される側の信頼を勝ち得なければならない。信頼に基づかなければ、裏領域に立ち入っていくことは許されないし、またそこで本物の姿があらわにされることもないであろう。したがって、通り一遍の観光客でもアクセス可能な表領域では得られない「事実」を目撃するためには、バードは単に「奥地」に踏み込むという物理的な環境の移動を果たすだけでは不十分だったのであり、「他の情報源がまったくないため、すべてを土地の人々自身から知る」 (Bird 2010 Vol. 1, viii, 筆者訳) ことを可能にする社会的関係への移行こそがより求められたのだった。それだからこそ、彼女には他の団体様ご一行のように傍若無人に振る舞うことはあり得なかった。そしてまた、ホスト側との関係以上に重要だったのが、間に介在する通訳伊藤との交渉であったのは言うまでもなからう。「私たち二人が困難で冒険に満ちた旅に協働して乗り出すことで、私たちはお互いに優しく相手を思いやる関係になるだろうと期待する」 (Bird 2010 Vol. 1, 156, 筆者訳) とバードが書き残したことに読み取られるべきことは、したがって、社会的に劣った存在を見下すことなく対等に接しようとする精神の高邁さのみではなく、そうしなければオーセンティックな日本に接することが覚束ないという周辺の事情でもあるはずだ。

さらに言えば、こうして普通の観光客が見ることのできない裏領域を、直接現地の人びとに取材して、バード自身の目や耳あるいは鼻腔や皮膚で確認し、それを客観的

な観察記録やデータにまとめたという経緯に対して承認がなされることは、彼女自身の著作の「本物性」にお墨付きを与えることにもなるだろう。そもそも、以前アメリカ旅行にもとづいた紀行文を発表して一定程度の名声を手にしていたバードが、日本を訪問した時点ですでに、記録を本にまとめて出版したらある程度は売れるだろうという思惑を抱いていたとしても何ら不自然ではないと思われる。

彼女は自身の本が人気を伴うだろうとあらかじめ予測しているからこそ、本物の日本を明らかにする本、歴史的次元の広がりをもつ本を書き表したいと切望する。著作を評価してもらいたいという圧迫があったため、彼女は熱心にイメージ、情報、語りの行為の操作を試みる。(Mayhan, 47、筆者訳)

こうして、これまで知られていなかった「事実」を明るみに出すことによって日本研究に影響を与えたと評価されるために、バードは著書の中に何としてもオーセンティックな日本を描き込む必要があったのであり、そしてそれに信憑性を与えるためにも、旅行者・観察者としての自らの姿勢や他者との関係性について記述する際に、さまざまな二項対立的イメージや、客観性を裏打ちするようなレトリックを彼女は必要としていたと理解される。

ピクチャレスクな風景

さて、『日本奥地紀行』にみられる論述のあり方に観光社会学の観点から分析を加える際に浮上してくるもう一つの要素は視覚性に関わるものである。自然にあまり手を加えることなく残っていた当時の北海道の景観に、バードはこのほか感銘を受け、いくつかの土地の風景を細部にわたって描写しているのだが、そこにはピクチャレスクな自然観が色濃く反映している。まずはいくつか例を拾ってみよう。

室蘭は小さな町で、とてもすばらしい湾の険しい岸辺に絵のように美しく位置している[……]山を登って頂上から眺めると、室蘭湾は実に美しい[……]この湾の美しさは何物にもひけをとらない。不規則な灰色の町は、高いところに灰色の神社があり、小さな湾の縁をだらだらとのびている、森の茂った険しい坂町である。山は深く森林におおわれ、大きな葉の蔓草がすっかり絡みあっていて、水際まで急な傾斜となって下っている。葡萄の花綱が静かに海面に姿を映している。暗い森林の上方に、輝く海のかなたに、赤く尖った火山の頂上が聳えて見える[……]初めて私は5000マイルも広がっている海原の大波が岸に打ちつけるのを見た。(バード 2000, 354-356)

Mororan is a small town very picturesquely situated on the steep shore of a most lovely bay [...] Mororan Bay is truly beautiful from the top of the ascent [...] this yields in beauty to none. The irregular gray town, with a

gray temple on the height above, straggles round the little bay on a steep, wooded terrace; hills, densely wooded, and with a perfect entanglement of large-leaved trailers, descend abruptly to the water's edge; the festoons of the vines are mirrored in the still waters; and above the dark forest, and beyond the gleaming sea, rises the red, peaked top of the volcano [...] and for the first time I saw the surge of 5000 miles of unbroken ocean break upon the shore. (Bird 2010 Vol. 2, 33-35)

有珠は美と平和の夢の国である[...]私が夜を過ごした入江では、樹木や蔓草は水面に頭を垂れ、その緑色の濃い影を映していた。それは湾の他の部分が夕日を浴びて金色や桃色に輝くのと鋭い対照をなしていた。丸木舟は、高くするために船縁に板を組み合わせてあったが、金色に輝く小さな浜辺に引き上げてあった。深い蔭になっている入江には、深く刻んで作られた古ぼけた帆掛船が木に繋がれていて、幽霊船が浮かんでいるようであった。森の茂っている丘、岩肌を見せている丘にはアイヌの小屋が見え、有珠岳の朱色の火山口は落日の光を浴びてさらに赤色に染まっていた。数人のアイヌは網を修理しており、さらに食用の海藻(昆布)を干すために広げているものもいた。一隻の丸木舟は黄金の鏡のような入江の水面を音もなく亙っていた。いく人かのアイヌ人が海岸をぶらぶら歩いていたが、その温和な眼と憂いを湛えた顔、もの静かな動作は、静かな夕暮れの景色によく似合っていた。寺から響いてくる鐘の音のこの世のものとも思えぬ美しさ—これだけですべてであったが、それでも私が日本で見た中で最も美しい絵のような景色であった。(バード 2000, 474-475)

Usu is a dream of beauty and peace [...] In the exquisite inlet where I spent the night, trees and trailers drooped into the water and were mirrored in it, their green, heavy shadows lying sharp against the sunset gold and pink of the rest of the bay; log canoes, with planks laced upon their gunwales to heighten them, were drawn upon a tiny beach of golden sand, and in the shadiest cove, moored to a tree, an antique and much-carved junk was "floating double." Wooded, rocky knolls, with Aino huts, the vermilion peaks of the volcano of Usu-taki redder than ever in the sinking sun, a few Ainos mending their nets, a few more spreading edible seaweed out to dry, a single canoe breaking the golden mirror of the cove by its noiseless motion, a few Aino loungers, with their "mild-eyed, melancholy" faces and quiet ways suiting the quiet evening scene, the unearthly sweetness of a temple bell—this was all, and yet it was the loveliest picture I have seen in Japan. (Bird 2010 Vol. 2, 131-132)

室蘭を俯瞰している例においては、近景に湾に沿って延びる町並みが配置され、中景には深い森林に覆われた山々、そしてその向こうの遠景には海原に浮かぶようにして駒ヶ岳が聳える。また、美しい有珠の情景描写においても同様に、平和で穏やかなアイヌの人びとの暮らしが投影された浜辺の様子が近景で呈示され、帆船掛をアクセントとした入江や自然と一体化したようなアイヌたちの住まう丘が中景を支配しており、その奥には夕日に光り輝く有珠山が望まれる。いずれの描写においても、遠景・中景・近景にそれらしい対象が置かれ、また自然と人工的な構築物や人の暮らしとが折り合い調和しながら一幅の景観を構成している。

UTJ において、こうした奥地の情景と明瞭なコントラストを成すのは都市部のたえずまいであり、たとえば横浜の街並みは「不規則ではあるが絵画美を感じさせない」(Bird 2010 Vol. 1, 20, 筆者訳)と描写され、また日本の町は一般的には絵画美を感じさせないとも言われる(Bird 2010 Vol. 1, 170)。例外的に新潟の家並みは魅力的な絵画美を有しているとされるが、それは日本の町としては極めて珍しいことだという注釈が付く(Bird 2010 Vol. 1, 217)。これらの町の描写を、先の室蘭や有珠の写生やそのほかの村の素描と比べてみて明らかなのは、*UTJ* においては、踏みならされたルート上にある都市や町 town と、奥地にある村 village や自然を二項対立的に対照させる姿勢が顕著であるということである。エディンバラに居を構えていたバードがスコットランドの「派手な美的消費の対象」としての自然風景に親しみ、仮に本国においては「有名な土地をくまなく訪ねて、旅と観察の経験を交換し比較しあう」(ウィリアムズ, 176) ような社交にいそんでいたとして、日本の奥地を辿るバードがそのような消費としての旅行を楽しんでいたという訳ではもちろんないのであるが、手つかずの自然を賛美するギルピン流の自然観がバードにも影響を与えているのは間違いないだろう。そもそも、上で見たようなピクチャレスクな風景を、まだ文明人が足を踏み入れたことのない土地において発見することは、バード自身がそのような美を認識できる能力、すなわちピクチャレスク的な美意識を、教養の一部として備えていることの証にもなるはずだ。「ピクチャレスクの理念は、多数の国民に美的判断というものは特権的な少数の才能なのではなく、誰にでも身につけることができ、ほとんど何にでも適用できるのだという認識を与えた」(Birmingham, 87, 筆者訳)のだとすれば、物見遊山の団体旅行客ならいざ知らず、中流階級出の女性として相応の知的訓練を受けてきたバードであれば、ピクチャレスク的な美の理念が、景観をまなざす心眼に基本的な枠組みを与えていただろうことは容易に想像がつく。かくして、日本の奥地を旅して回った成果として、地理学的な貢献につながるような本物の社会の姿を提示することに加えて、バードがこれまで旅してきたハワイ(Bird 2010 Vol. 2, 35)やヘブリディーズ諸島(Bird 2010 Vol. 2, 41)の場合と同様に、当時の北海道という欧米人にはほとんど知られていなかった場所においてさえも、確かな美的判断能力にもとづいて絵画的な美の風景を見落とすことなく目利きのまなざしを向け、写真に切り取るかのごとく言葉のスケッチにして審美的な戦利品として故国に持ち帰ること

になる。

おわりに

以上考察してきたように『日本奥地紀行』は、持病を克服するために医師から勧められた療養目的の旅行の副産物として生み出された、旅先での不便を託つことなく堪え忍ぶ堅固な意志と冷静で客観的な観察能力および他者に対する敬意を忘れないコミュニケーション能力を備えた女性が書き残した紀行文という単純な装いの下に、いくつかの社会的あるいは文化研究的な分析を喚起するような要素を潜在させているテキストであると見なされうるだろう。そしてそのような分析をすすめるに際しては、旅や旅行のジェンダー性、支配的立場から向けられた観光のまなざし、観光客や団体旅行者をめぐる社会的言説、オーセンティシティーと裏領域、さらにはまたピクチャレスクな自然観と風景や景観の記号化といった論点が大いに有効であると主張されよう。冒頭にも書いたように、本論においてはこれらの論点を覚え書き的にまとめてみたに過ぎないが、少なくともこうした観光社会的な考察によって『日本奥地紀行』というテキストの複層性が見え始めてくるということは確認されるはずである。

【引用文献】

Bermingham, Ann, “The Picturesque and Ready-to-Wear Femininity” in *The Politics of the Picturesque* (Cambridge University Press, 1994)

Bird, Isabella Lucy, *Unbeaten Tracks in Japan*, 2 volumes (1880; Cambridge University Press, 2010).

Bird, Isabella L., *Unbeaten Tracks in Japan*, abridged new edition (John Murray, 1885)

イザベラ・バード、時岡敬子訳『イザベラバードの日本紀行』上・下(2008年、講談社)

イザベラ・バード、高梨健吉訳『日本奥地紀行』(2000年、平凡社)

Brendon, Piers, *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism* (Secker & Warburg, 1991).

Chamberlain, Basil Hall, *Things Japanese* (Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., 1891).

Chard, Chloe, “From the Sublime to the Ridiculous: The Anxieties of Sightseeing”

in *The Making of Modern Tourism: The Cultural History of the British Experience, 1600-2000* eds. Hartmut Berghoff et.al. (Palgrave, 2002).

Checkland, Olive, *Isabella Bird and a Woman's Right: To do What She Can do Well* (Scottish Cultural Press, 1996).

Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life* (Anchor, 1959).

Harper, Lila Marz, *Solitary Travelers: Nineteenth-Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation* (Fairleigh Dickinson University Press, 2001).

MacCannell, Dean, "Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings" *The American Journal of Sociology* Vol. 79, No. 3, 589-603 (1973).

Mayhan, Maggie, *Isabella Bird: Liminal Performances* (VDM Verlag Dr. Muller, 2009).

Meyrowitz, Joshua, *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior* (Oxford University Press, 1985).

Middleton, Dorothy, *Victorian Lady Travellers* (Academy Chicago Publishers, 1993).

宮本常一、『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』(2002年、平凡社)

Rojek, Chris and Urry, John, "Transformations of Travel and Theory" in *Touring Cultures: Transformations of Travel & Theory* eds. Chris Rojek and John Urry (Routledge, 2005).

Stoddart, Anna M., *The Life of Isabella Bird* (1906; Cambridge University Press, 2011).

Urry, John, *The Tourist Gaze*, second edition (Sage Publications, 2006).

レイモンド・ウィリアムズ、山本和平・増田秀男・小川雅魚訳『田舎と都会』(1985年、晶文社)